樋口芳麻呂氏蔵葉室頼業筆本『和歌一字抄』翻刻（五）

日比野　浩信

（前号の続き）

移　庭移秋花　　京極前太政大臣

七六一　わか宿に秋の野へをはうつせりと花みにゆかん人に告はや

野花移庭　　範永朝臣

七六二　心ありて露やをくらんのへよりも匂ひまされる秋萩のはな

拂掃　柳拂池水　　經衡

七六三　池水にみ草もとらて青柳のはらふしつえにまかせてそみる

風払落花　　賀茂成助

七六四　わか心いかにせよとて散つもる花さへ風のさそふなるらん

旅宿払霜　　國房

七六五　物さひし旅ねの床にかたしきの袖してはらふ冬の夜の霜

不払　見花不払庭　　嘉言」（七六オ）

七六八 花ちれは手もふれてみる庭の面を心にあらて風やはらはん

惜花不払庭　兼隆通イ

七六七 春の内は散つもるとも清めせし花にけかる、宿といはなん

同　為義朝臣

七六八 桜花庭もはたらに散つめと匂をおしみた、にこそみれ

荒屋閑虫　嘉言

七六九 わか宿はあさちか原にあれたれと虫の音聞そ取所なる

荒　荒屋閑虫　嘉言

七六九 わか宿はあさちか原にあれたれと虫の音聞そ取所なる

（ママ）月照巳屋　俊頼朝臣

七七〇 閨のうへのひまをかそへてもる月は空よりもけにくまもなき哉

碎　風碎野花　仲正通イ

七七一 身のうさを野分にあへる花なれやちりひちに成心ちのみして」（七六ウ）

（1）冒侵　冒雨見花　俊頼朝臣

七七二 散はなのしつくにぬる、袖なれはかはくもおしき物にそ有ける

凌　野經（ママ）凌花　橘俊宗

七七三 露しけみ小野、萩原過行は花すり衣きぬ人そなき

同座　源師光

七七四 衣手にうつしてをみん花の色を分てそきつる野ちの朝露

踏　山路踏花　大江廣經朝臣

七七五 おしとおもふ花とみれ共いか、せんよきて何へき（ママ）山路ならねは

結(2)　柳結落花　　花園左大臣

七六　散花の柳のいとにむすはれてあらぬしつえに匂ひぬる哉

庭樹結葉　　經信卿」（七七オ）

七七　玉かしは庭も葉ひろに成にけりこやゆふしても神まつる比

以上同座　　匡房

七八　庭のおもは月もらぬまて成にけり梢に夏のかけ茂りつゝ

庭樹結葉　　白河院御製

七九　をしなへて梢みとりに成にけり松のちとせもわかれさりけり

冰結浪不起流イ　　六條宮

八〇　あさ氷にほ(3)もかよはす成にけり何をよすらん田子のうら波

谷水結氷　　花園左大臣

八一　谷河のよとみに結ふ氷こそみる人もなきかゝみ也けり

閉　氷閉水鳥　　俊頼

八二　よをさむみ結ふ氷や水鳥のかつく岩まの関と成らん」（七七ウ）

氷閉河水　　同

八三　飛鳥河ふちは氷にとちられていかてか瀬にも成かはるらん

冰閉池水　　同

八四　夜もすからまの、かやはらさえ〳〵て池の汀も氷しにけり

染　梅香染衣　　橘則長

八五 梅かゝの袖に移てこよひさへいもかあたりと思ひける哉

池水染藍　行宗卿

八六 池水を誰かそめけん御そのふのあるより色のふかくみゆるは

霧染紅葉　俊頼

八七 降きえすしくれにたへて鏡山影みゆる斗紅葉しにけり

告　梅告春近　顕季卿」（七八オ）

八八 雪の内につほみにけりな梅の花春明かたに成やしぬらん

鶯告春　俊頼

八九 春そとは霞にしるし鶯の花のありかをそことつけなん

晩風告秋　同

九〇 夕まくれわひしき風におとろけは荻の葉そよく秋はきにけり

草花告秋　源縁

九一 咲にけり口なし色の女郎花いはねとしるし秋のけしきは

同　雅兼卿

九二 さきそむる朝の原の女郎花秋をしらするつまにそ有ける

同 二首同座　顕季卿

九三 露むすふ秋にははやく成にけり浅ちか原のうつろふみれは」（七八ウ）

同　行宗卿

九四 ゆふかけていく田の森のすゝしきは風こそ秋の使なりけれ

伴　客伴月来　　源仲正

八五　と丶めはやこよひの月にさそはれてあくかれ来る人の心を

談　月前談往事　　俊頼

八六　ありしよを昔かたりになしはて丶かたふく月を友とみる哉

同　　基俊

八七　昔みし人は夢ちに入はて丶月と我とになりにけるかな

契　花契千年　　匡房

八八　いはねとも色にそしるき桜花君かちとせの春のはしめは

花契多春　　經信卿」（七九オ）

八九　も丶しきのみかきの原の桜花春□(4)にほはさらめや

同　　通俊朝臣

八〇　みちよをへて君かみるへき桃の花かつ〳〵けふそ咲はしめける

同　　師頼朝臣

八一　みとりなる松とのみこそ思ひしか花もちとせを契る也ける

菊契千年　　顕季卿

八二　色も香もむつましきかなきくの花ちとせの秋のかさしと思へは

菊契千秋　　実行

八三　君か代は山路のきくともろ友にいくつのとしの二かへりまて

落葉契千秋　　橘則季

八二四 散はなをおしまるゝ哉紅葉はをみるへき秋はちとせと思へは」（七九ウ）

花契遐年　待賢門院中納言

八二五 そへてみる宿（君）もひさし（く）の菊の花ともに千年の契（をイ）とそみる

松契遐年　俊実卿

八二六 水の面に松のちとせ（しつえの）のみ（ひイ）ちぬれは千年は池の心なりけり

鶴契遐年　顕季卿

八二七 むれゐたる鶴のけしきにしるき哉千とせすむへき宿の池水

松樹久契　俊頼

八二八 位山久しき松の影にゐてたのむみさへもとしをふるかな

水石契久　同人（堀川院御時所衆和哥曾代人）

八二九 杣河を誰そのかみにせきそめてたえぬ岩まの瀧となしけん

花契遐年　待賢門院中納言」（八〇オ）

八三〇 しら雲にまかふ桜の梢にてちとせの春を空に知かな

竹契遐年　俊頼

八三一 うれしやとみよなる橋の河竹にそよとこたへて風わたる也

松契遐年　俊実朝臣

八三二 水の面に松のしつえのひちぬれは千年は池の心なりけり

同　俊頼

八三三 君かため岩根の松はいはね共けしきはみよのしるしとそ思ふ

催　郭公催恋　　俊頼

八四　いと、敷袖そしほる、時鳥なく音や恋のしるへなるらん

秋花催興　　顕季卿

八五　よと、もに野へに心やあくかれん本あらの萩の花しちらすは」（八〇ウ）

恋催奮意　　同

八六　思ひ出よあまのかく山よそにのみき、わたらんといつか契し

同　　俊頼

八七　はつせ河岩もとあらひ行水のわきかへりてもぬらす袖かな

意情心　山家春意　　國基

八八　霞つ、はる、時なき山里はおほつかなくて春や過なん

花駭定心　　永源

八九　ともすれは四方の山へにあくかれてゆかにおられぬ我心かな

同　　俊増僧都陰陽堂

九〇　西にのみかくる心をさくら花よもの山へにあくかる、かな

月前遠情　　俊頼」（八一オ）

九一　出雲にははれぬや雲にとちられてこよひ月や朧成るらん

月前旅情　　顕季卿

九二　松かねに衣かたしきよもすからなかむる月もいもみるらんか

山家春意　　俊宗

八四七 見わたせは野沢のあしもつのくみぬ今は門田の種まかせてん

同　　通俊朝臣

八四八 春なれは□(5)山里にすめはそみつるけさの明ほの

思憶(ママ)述懐　夜思桜花　能因

八四九 桜咲春は夜たになかりせは夢にも物はおもはさらまし

同　　橘元任

八四六 明はまつ尋にゆかん桜花これはかりたに人におとらし(おくれイ)」(八一ウ)

夜思落花　隆源

八四七 衣手にひるは散つる桜花よるは心にかゝるなりけり

雨夜思花　嘉言

八四八 春の夜のあけもはてなはいてゝみむ今宵の雨に花咲ぬらん

雨夜思瞿麦　能因

八四九 いかならん今宵の雨に床夏のけさたに露のおもけなりつる

雨夜思月　清成法橋

八五〇 雨ふらぬ今宵なりせは月かけのもるにうれしき(いた)。まならまし

雨中思月　為義朝臣

八五一 たちかくすあまのうき雲なかりせは山のは出る月(は)をみてまし

雨夜思萩　長能」(八一オ)

八五二 ぬれ〳〵(つゝイ)もあけは先みん宮城のゝもとあらの小萩しほれしぬらん

思野花　　良暹

八三　朝夕におもふ心は露なれやかゝらぬ花のうへしなければ

夜思落葉　　行宗卿

八四　おち積る木のはの色はあかけれとよをてらさぬそかひなかりける

夜思山雪　　永源

八五　冬のよのふけ行まゝに思かなよもの山へに雪やふるらん

月見思都　　為義朝臣

八六　我ことを都の人もおもふらんたゝにやむへきよはの月かけ

思貴人　　俊頼

八七　谷河のみかけにくつるもろすけも雲ゐに嶺の岩ねをそ思ふ」（八二ウ）

花下述懐　　經信卿

八八　瀧のいとにちりてみたるゝ花みれはぬいたにあへぬ錦なりけり

雨中述懐　　念西入道

八九　いとゝしくさひしき秋の夕くれに窓うつ雨の音さへそする

夜思落花　　俊頼朝臣

八〇　春のよのやみにし風のふかさらはみぬまに花をちらさましやは

閑嵐述懐　　同

八一　吹まよふあらしの音や旅人の涙の玉のをとはなるらん

行路述懐　　經信卿

八六 おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白波

旅中述懐　俊綱朝臣」（八三オ）

八七 わするなよをたの中道打わすれ心空なる旅の別を

知　瀧音知春　斉院宣旨

八八 おちたきり心とけたる瀧のいと（音イ）に春きにけるときこゆなる哉

三 依水知山花　顕季卿

八九 散かゝる細谷河の山桜たつぬる人のしるへなりけり

野草花知夏　源縁

九〇 いはねとも夏とはみえぬおふるより浅芽ましりのやまと撫子

五 同座　藤時房

九一 さいたつましけりにけらし夏山のすその、道もたえ〳〵にみゆ

六上 早凉知秋　經信卿

九二 うたゝねのさむくもある哉唐衣袖のうちにや秋の立らん」（八三ウ）

十 對鏡知身老　無名

九三 ます鏡おもてにたゝむしはにこそとしのかさなる数はみえけれ

九 水鳥知主 裏書　定家

九四 みなれてはこれもなこりやをし鴨のなれたる宿の主はわきける（リイ）

八 時雨知時 同　同

九五 いつはりのなき世なりけり神無月たかまことより時雨初けん

不知　恋不知程　　俊頼

八七　せきあへぬ涙にてこそわか恋の積るほとをはしるへかりけれ

同　　左衛門

八七二　ふりつみし雪はきえねと吉野山瀧の音こそ春は知けれ

依水知山紅葉　　範永朝臣「（八四オ）

八七三　色かはる岩まの水をむすはすはおのへの梢みにやゆかまし

暁知早凉　　顕季卿

八七四　秋かせやや、立ぬらん夢さめて袂す、しく成も行かな

不弁　緑竹不弁秋　　師經卿大蔵

八七五　みとりにて色もかはらぬ呉竹はよのなかきをや秋としるらん

忘　依花忘家　　顕季卿

八七六　よと、もに野へにて年やくらさましときはにさける桜なりせは

花下忘帰　　良暹

八七七　とふ人も宿にはあらし山桜ちらてかへりし春しなけれは

同　　能宣

八七八　故郷へかへらん道もおもほえすなを尋てみにはきにしを」（八四ウ）

同　　能頼（ママ）

八七九　あつまちの老そのもりのはなならは帰らんことを忘ましやは

閑郭公忘帰　　顕季卿

八二 時鳥聲あかなくに尋きていく田の森にいくよへぬらん

對泉忘夏　土御門右大臣

八三 むすふ手の秋よりさきにすゝしきは泉の水に夏やこさらん

同　資仲卿

八四 結ふ手のあたりすゝしき泉には夏くれしより秋やきにけん

同　家經

八四 下くるゝ(くる)岩まの水のあたりにはあふきのかせをかる人もなし

不忘未忘(ママ)依月不忘。秋歟　俊頼」（八五オ）

八五 はらの池のあしまにやとる月影はわかれし秋のかたみなりけり

未忘春意(ママ)　經信卿

八六 故郷のはなの盛はすきぬれとおもかけさらぬ春の空かな

厭(6)　對花厭風　俊頼朝臣

八七 青柳のいともて風を結とめて花のあたりへやらしとそ思ふ

厭賤恋　同

八八 あやしきもうれしかりけりをとしむる其こと(をの、ちなはにイ)のはにかゝると思へは

未飽　望花未飽　関白

八九 いまよりは花みぬ身とや成なましあかぬ心もくるしかりけり

郭公未飽　行尊僧正

八十 時鳥たゝ一聲のなこりこそ待にはまさる歎なりけれ」（八五ウ）

同　　俊頼

八二　なとてかくおもひそめけん時鳥雪のみ山の法の末かは

交　櫻柳交枝　　同

八三　あすもこんしたり桜の枝ほそみ柳のいとにむすほゝれけり

比　鹿聲比嵐　　同

八四　みむろ山鹿のなく音にうちそへてあらし吹なり秋の夕くれ

寄　春情寄花　　實政卿

八五　春ことにみるとはすれと桜はなあかても年のつもりぬる哉

秋情寄萩　　俊頼

八六　秋萩を心にかけてをかさきのおほろあしけをなつみてそ行

情寄女郎（ママ）　　通俊卿」（八六オ）

八七　あさ夕におもふもしるく女郎花心へたつな野への秋霧

同座　　永源

八八　心ありておりもてそみる女郎花まねく薄のうらむ斗も

依　依花待春　　花園左大臣

八九　なにとなく年のくるゝは惜けれと花のゆかりに春を待哉

依花惜春　　坂上定成

九〇　にほふことおりをもわかぬ花ならは春を限となけかさらまし

依水知山花　　顕季卿

ちり積るほそ谷河の山桜（桜花イ）たつぬる人のしるへなりけり

依水知山紅花　範永

色かはる岩まの水をむすはすはおのへの梢みにやゆかまし」（八六ウ）

依水月明　行宗卿

かねてよりすむ池水のなかりせはこさ（ママ）へてらす月をみましや

依月夏涼　顕季卿

なかむれはすゝしかりけり夏のよの月の桂に風や吹らん

秋依月勝　橘俊宗

なにことに春の曙をとらましさやけき月の秋なかりせは

依月客来　永源

㉗われひとりなかめてのみやあかさましこよひの月の朧なりせは

客依月来　三条大納言

忘にし人もとひけり秋のよは月いてはこそ（とイ）待へかりけれ

不依　恋不依人　俊頼朝臣

くれなひの袖にはつれしまみよりもなれかつゝりのわゝけ（かイ）をそ思ふ

及　照射及暁　顕季卿」（八七オ）

ともせともこよひも明ぬいたつらにあふさか山もかひなかりけり

纔　花纔残　顕季卿

桜花青はの（か）中の（にイ）散のこる梢や（はイ）春のとまりなるらん

落花纔残　　源仲正

九九 紅葉丶のあしろのひをにましらすはちり斗をもえりてみましや

纔閑時鳥　　仲實朝臣

九〇 ほのかにそなを啼わたる時鳥(かなイ)こよひはかりを何忍らん

寒草纔残　　定家

九一 吹かせのやとす木のはの下はかり霜をきはてぬ庭の冬草

纔見恋　　行宗

九二 うちつけに廿日の月のはつ〳〵になにとみそめてこひしかるらん」（八七ウ）

自　花自有情　　經信卿

九三 物をこそいはねと花も心あれはさくへき程をすくしやはする

月夜自涼　　俊頼朝臣

九四 衣手もやゝはたさむし夏の夜の月のひかりは秋の空かは

未　花未遍　　範永朝臣

九五 さきはてぬ梢おほかる宿なれは花も匂も久くやみん(しかりけりイ)

郭公不遍　　俊頼朝臣

九六 時鳥月はみしとやおく山の梢かくれに聲ならすらん

紅葉未遍　　定經朝臣

九七 中〳〵にかたくもみえぬおりにこそあらはにはゆる色はみえけれ(へイ)

猶尚(ママ)　池氷猶残　　嘉言」（八八オ）

九八 むら〳〵に氷のこれる池水はところ〳〵や春は立らん

藤花尚盛　　國基

九九 宿からは夏になれとも藤の花うつろふ色のみえすも有哉

紅葉尚残　　通俊卿

一〇〇 いかなれは舟木の山の紅葉はの秋はすくれとこかれさるらん

春風尚寒　　行宗

一〇一 いかなれはうら〻にてれる春日さへ松吹かせの聲は凉しき

各　各行見萩　　藤敦定朝臣　左馬頭

一〇二 秋はきのさきぬる野へをみるのみそ心は人にかはらさりける

不改　竹不改色　　堀河院御製

一〇三 千代ふれと色もかはらぬ河竹はなかれての世のためしなりけり」（八八ウ）

同　　仲實朝臣

一〇四 葉かへせぬ竹のはすへに吹かせのおさまれる代とひ〻くなる哉

同　　顕季

一〇五 すへらきのなかれもこえす河竹のみとりの色もいろつきんまて

不異　梅花不異月　嘉言

一〇六 さかりには月さやかなる梅のはなちらはやへにやならんとすらん

毎秋同月　　三宮

一〇七 年ふれは渕も瀬になる水のおもにすみか〻はらぬ秋のよの月

經年同恋　　関白

九二八　としふれと猶ときはなる我恋や色もかはらぬ住吉の松

似　春雪似花　　伊勢大輔」（八九オ）

九二九　あさみとり春の空より降雪ははな散里の心ちこそすれ

草蛍似露　　式部

九三〇　草しけみをける露かとみえつるはすたく蛍の光成けり

夘花似夕臭　　匡房

九三一　けさみすはまかひなましを夕顔のかきねに白くさけるうの花

夏月似雪　　良暹

九三二　夏の夜に雪かとみゆる月影のいるはきえぬる心ちこそすれ

月光似晝　　源頼実

九三三　秋のよのくまなき空の月かけはなけきやすらん葛城の神

叢露似玉　　相模

九三四　玉のをのみたれたるとて草のはをむすは、袖に露やこほれん」（八九ウ）

水聲似雨　　行宗卿

九三五　村雨のをとにたかはぬ山河にいかてか水のまさらさるらん

池冰似鏡　　匡房兼房

九三六　風さむみ結ひし水のこほれるはけさみる人のかゝみ成けり

野萩似錦 裏書　　西行

八三七 けふそしるその江にあらふ唐錦萩さくのへに有ける物を

卯花似月　無名

八三八 白妙にさけるかきねの卯花はさやけき秋の月かとそみる

如　樹陰如秋　匡房卿

八三九 夏山の木の下影の涼さに思ひたかへて鹿や鳴らん

晩涼如秋　範永朝臣」（九〇オ）

八四〇 松風の夕日かくれに吹ほとは夏すきにける空かとそみる

同　國基 房イ

八四一 夏なれと夕風涼（かけイ）し小萩原したえや秋の色に成るらん

同座　義孝 伊勢守

八四二 夏の日の暮行空の涼しさに秋のけしきを空にしるかな

同　頼家卿

八四三 夏の日も夕日かくれになる時は秋風よりも涼しかりけり

晩風如秋　顕季卿

八四四 夕されの風のけしきの涼しさに鹿啼ぬへき心ちこそすれ

竹風如秋　俊頼朝臣

八四五 秋きぬと竹のそのふ（葉のうへにイ）になのらせてしの丶を薄人（ふゝきイ）はかる也」（九〇ウ）

松風如秋　永胤法師

八四六 みな月も松の木陰の涼しさははつ秋風にことならぬ哉

水風如秋　　俊頼朝臣

二四七 澤へなる蛍も風にはかられてけふを秋とや鴈告らん

水岸如秋　　為義朝臣

二四八 河風の涼しき音をおもふにはせこかわさ田も苅そめつらん

秋月如晝　　隆經朝臣

二四九 菊のうへの露なかりせはいかにしてこよひの月をよるとしらまし

落葉如雨　　家經朝臣

二五〇 紅葉ちる音は時雨の心ちして梢の空はくもらさりけり

同　　「頼実」（九一オ）

二五一 木の葉ちる宿はきゝわくことそなき時雨するよも時雨せぬよも

竹風如雨　　基長卿

二五二 なよ竹の音にそ袖をかつきつるぬれぬこそは風と知ぬれ

同　　兼房卿

二五三 風吹はをさゝか原にすむ人はたゝ一むらの雨かとそきく

兼花如雪　　源頼長

二五四 あしの穂の波より遠の汀には降ともみえぬ雪そつもれる

草露如玉　　顕仲卿

二五五 露すかるお花かうれをけさみれは玉ちる里の心ちこそすれ

菊粧如錦　　經信卿

六六六 うつろへは錦にまかふ色をみてむへむら菊と人はいひけり」（九一ウ）

遐齢如松　顕季卿

六六七 二葉なる松を引うへて誰もみなをなしちとせのかけをこそまて

花飛如雪　有綱

六六八 白雪にみえまかひつゝ散花は消えぬはかりそしるし成ける

不如　月不如秋　太政大臣実行

六六九 すみのほる月の桂は常よりも紅葉の秋や照まさるらん

毎　毎山有春　入道中納言 顕基 顕季ィ

六六〇 我か宿の梢はかりとみし程に四方の山へに春はきにけり

毎家有秋　白河院御製

六六一 宿ことにおなし秋（のへィ）をやうつすらんおもかはりせぬ女郎花哉

二毎年見花　永源」（九二オ）

六六二 年をへてことしはかりと思ひつゝおゝくの春の花をみる哉

三同　源縁

六六三 春ことにみれともあかぬ山桜年にや花の咲まさるらん

毎朝望菊　顕季卿

六六四 菊の花咲ぬる時はめもあはすいく朝露のおきてみゆらん（かれィ）（つィ（ィ））

毎夜待時鳥　俊頼朝臣

六六五 時鳥よろつ心をつくさせてけふそ幽にほのめかすなる

同　　同

九六六 郭公まつにしるしのあらはれてねぬよの数に聲をきかはや

月毎秋友　　同

九六七 おもひくまなくてもとしのへぬる哉ものいひかはせ秋のよの月」（九二ウ）

月毎水宿　　肥後

九六八 山のはにいて入月はひとつかてあまたの水にすめる影哉

毎年見花　　太政大臣 実行

九六九 尋てもみなみぬ春はなきものをあかぬ心のとしにそふ哉

毎朝見花　　同

九七〇 さきしより宮木の杜の桜はなあくるまつまもいやはねらる、

皆　山家皆桜花　　國基

九七一 むつましきかのみそすれ山里は梅のにほはぬ宿しなければ

山路皆花　　慶基法し

九七二 山桜みちみえぬまて散しきて花の都の方そ知れぬ

山皆紅葉　　經衡」（九三オ）

九七三 をしなへて山は紅葉に成にけり秋はときはの森やなからん

不合(8)　時鳥不合　　俊頼朝臣

九七四 今こそは二むら山の時鳥聲おりはへてあやに鳴なれ

多　梅香夜多　　皇太后宮下野

九七五 色みえぬ梅かゝはかり匂(に)ふ哉よふかく(よるふくイ)風のたよりうれしく

花契多春　　經信卿

九七六 もゝしきやみかきかはらの桜はな春したゝ(え)すは匂はさらめや

松契多春　　同

九七七 春日山たかねにたてる松か枝のあひくる春は神やしるらん

菊送多秋(年イ)　　関白

九七八 君かよをなか月にさく菊のはなへにける秋もかきりなき哉」（九三ウ）

早苗多　裏書　　定家

九七九 うへくらすみとりの早苗里ことに民の草葉の数もみえけり

多年翫霞　　行宗

九八〇 ことしよりやへさく梅のちとせへてにほはん春に君やあふへき

花契多春　　顕季

九八一 君か代のちとせのはるに桜花これやはしめの匂ひなるらん

少　花漸少　　関白

九八二 日をへつゝこすゑあらはに成(なし)はてゝしつえに残る花は一ふさ

三同　　顕輔卿

九八三 暮てゆく春の日かすも散花もなかは(にイ)ゝおほく過にける哉

四同　　俊頼朝臣」（九四オ）

九八四 葉かくれはしはしもすまへ桜はなつゐにはかせのねにかへす(るイ)とも

同　　太政大臣 実行

八五 けふも又散にけらしな桜花あすは青葉に成やはてなん

郭公語少　　橘成元

八六 さみたれをまつらの山の時鳥ほのかに啼て過ぬなる哉

有在（ママ）　春情有花　　顕季卿

八七 心みにさてもや春はうれしきと花なきとしに逢よしもかな

同　　顕輔卿

八八 わか心春の山へにあくかれて花ゆへ人にうらみられぬる

同　　太政大臣 実行

八九 春ことにかはらぬものは色ふかく花にそめてし心なりけり」（九四ウ）

毎家有秋　　白河院御製

九〇 やとことにおなし秋（のへ）をやつすらんおもかはりせぬ女郎花哉

落葉有聲　　学顕（ママ）隆頼

九一 風ふけはならのかれはのそよ〳〵といひあはせつゝいつち行らん

無　無風花散　　三条大納言

九二 山桜はるの霞につゝまれて風にしられぬ花もちりけり

同座　　隆源

九三 吹かせにさそはれねとも散ぬれは花はうしともおもひぬる哉

月光無夜　　資仲卿

九四 雲晴てふけ行空の月みれは秋は夜なき心ちこそすれ

雪花無定樹　　為義朝臣」（九五オ）

九五 春またて梅も桜も雪ふれはおなし色なる花そ咲けり

乍伏無実恋　　顕季卿

九六 ことならはふす名もたちぬひたすらに打もとけなんいもか下紐

同　　俊頼朝臣

九七 小車のわつかに床はみつれ共錦のひもはとかてかへしつ

一　杜若一叢　　源仲正

九八 ことはなはにほはぬさはに紫の一むらこなるかきつはた哉

一葉散林　　國房

九九 いつしかとはつ秋風に山しなのをかへのくるす朽葉散らん（しイ）

秋唯一日　　藤隆資

一〇〇 たつぬれは秋はけふにて暮（ぬ）にめり野へのけしきは露もはらはて（かはらてイ）」（九五ウ）

（1）底本「胃」のようにみえる文字。

（2）底本、糸扁に「告」のような文字。以下、注記せず。

（3）歌題「冰」の左傍書か。

（4）日本歌学大系所収本では、第四句「春したえずば」とある。

（5）管見の範囲では補い得ず。

（6）底本「厭」字、雁垂ナシ。歌題も同じ。
（7）傍書、行の左側にあり。
（8）「令」のようにもみえる文字。下巻の目示では「不定」に誤る。歌題は「時鳥不合」と読める。
（9）「のヘイ」は「をや」の右傍にあるが、「秋」の右傍に「。」として位置の移動を示す。これに従った。

（続）